

# 局所体の分岐群について

2007年10月19日 16:00 ~ 17:00  
九州大学理学部一号館 1434号室

## 概要

局所体の絶対ガロワ群に、剰余体が完全という仮定なしでも、上付き分岐群によるフィルトレーションが定義できる。その次数商はアーベル群であり、剰余体の標数  $p$  が正ならば、 $p$  倍すると 0 である。

分岐群の定義を復習し、次数商の構造を解説する。

## 目次

- 1 分岐群の定義：局所体の有限次ガロワ拡大  $L/K$  に対し、そのガロワ群  $G = \text{Gal}(L/K)$  の分岐群の定義を復習する。
- 2 分岐群の性質 I：次数商  $\text{Gr}^r G$  の可換性の証明を解説する。接空間  $\Theta^{(r)}$  の基本群の可換商からの標準全射  $\pi_1(\Theta^{(r)})^{\text{ab}} \rightarrow \text{Gr}^r G$  の構成も解説する。
- 3 分岐群の性質 II：標準全射  $\pi_1(\Theta^{(r)})^{\text{ab}} \rightarrow \text{Gr}^r G$  が、分離同種を統制する商  $\pi_1(\Theta^{(r)})^{\text{alg}}$  を経由することを解説し、 $\text{Gr}^r G$  が  $p$  倍で消えることを導く。

## 1 分岐群の定義

離散付値に関して完備な体を、局所体とよぶ。  $L$  を局所体  $K$  の有限次分離拡大とし、  $M$  を  $L$  を含む  $K$  の有限次ガロワ拡大とする。  $G = \text{Gal}(M/K)$  をガロワ群、  $H = \text{Gal}(M/L) \subset G$  を対応する部分群とすると、有限  $G$  集合  $X = \text{Hom}_K(L, \overline{K})$  は、  $G/H$  と同一視される。  $K$  の分離閉包  $\overline{K}$  の剰余体  $\overline{F}$  は、  $K$  の剰余体  $F$  の代数閉包である。剰余体  $F$  は任意である。

$G$  に正規部分群による減少フィルトレーション  $G^r \triangleleft G$ ,  $r \in \mathbb{Q}, r > 0$  を定義する。これは、各  $L$  に対し、  $X$  の商集合  $X^{(r)} = G^r \backslash X$  で、ある条件をみたすものを定めることと同じことである。  $X^{(r)}$  を次のように定義する。

$L$  の整数環  $\mathcal{O}_L$  の表示  $\mathcal{O}_L = \mathcal{O}_K[T_1, \dots, T_n]/(f_1, \dots, f_n)$  をとる。

$$X = \{t = (t_1, \dots, t_n) \in \mathcal{O}_K^n \mid f_1(t) = \dots = f_n(t) = 0\}$$

となる。  $K$  上のアフィノイド多様体  $Q^{(r)}$  を

$$Q^{(r)}(\overline{K}) = \{t = (t_1, \dots, t_n) \in \mathcal{O}_K^n \mid \text{ord} f_1(t) \geq r, \dots, \text{ord} f_n(t) \geq r\}$$

で定める。  $Q^{(r)}$  の幾何的ファイバーの連結成分のなす集合を  $\pi_0(Q_K^{(r)})$  で表わすと、有限集合の全射  $X \rightarrow \pi_0(Q_K^{(r)})$  が得られる。この全射によって、  $\pi_0(Q_K^{(r)})$  を  $X$  の商集合  $X^{(r)}$  と考える。これは  $\mathcal{O}_L$  の表示によらず、  $G$  のフィルトレーション  $G^r$  を定める。

上の  $X^{(r)}$  の定義を、スキームのことばでいいかえる。  $S = \text{Spec } \mathcal{O}_K, T = \text{Spec } \mathcal{O}_L$  とおく。  $P, Q$  を  $S$  上のスムーズなアフィン・スキームとし、カルテシアン図式

$$(1.1) \quad \begin{array}{ccc} T = \text{Spec } \mathcal{O}_L & \longrightarrow & Q = \text{Spec } B \\ \downarrow & & \downarrow \\ S = \text{Spec } \mathcal{O}_K & \longrightarrow & P = \text{Spec } A \end{array}$$

を考える。  $S \rightarrow P$  と  $T \rightarrow Q$  は閉埋め込みであり、  $Q \rightarrow P$  は準有限かつ平坦とする。

例:  $A = \mathcal{O}_K[X_1, \dots, X_n], B = \mathcal{O}_K[T_1, \dots, T_n]$  とし、  $Q \rightarrow P$  を  $X_i \mapsto f_i$  で定める。  $S \rightarrow P$  を  $X_i \mapsto 0$  で定めると、図式 (1.1) はカルテシアンである。  $Q \rightarrow P$  は  $T$  の近傍で準有限かつ平坦である。

$\pi$  を  $K$  の素元とし、  $I = \text{Ker}(B \rightarrow \mathcal{O}_L)$  とおく。  $r = n/m > 0$  を有理数とし、  $B^{(n/m)} = B[I^m/\pi^n]$  とおく。  $\widehat{B^{(n/m)}}$  を  $B^{(n/m)}$  の  $\pi$  進完備化とすると、  $Q^{(r)}$  はアフィノイド環  $\widehat{B^{(n/m)}}[1/\pi]$  によって定義されるアフィノイド多様体である。

$\overline{B_{\mathcal{O}_K}^{(r)}}$  で  $B^{(n/m)} \otimes_{\mathcal{O}_K} \mathcal{O}_{\overline{K}}$  の正規化を表わす。 Epp の定理より、  $\overline{B_{\mathcal{O}_K}^{(r)}}$  は  $\mathcal{O}_{\overline{K}}$  上有限表示であり、幾何的閉ファイバー  $\overline{Q_{\overline{F}}}^{(r)} = \text{Spec } \overline{B_{\mathcal{O}_K}^{(r)}} \otimes_{\mathcal{O}_{\overline{K}}} \overline{F}$  は被約である。さらに、標準写像

$$X^{(r)} = \pi_0(Q_{\overline{K}}^{(r)}) \rightarrow \pi_0(\text{Spec } \overline{B_{\mathcal{O}_K}^{(r)}}) \leftarrow \pi_0(\overline{Q_{\overline{F}}}^{(r)})$$

は双射であり、絶対ガロワ群  $G_K = \text{Gal}(\overline{K}/K)$  の作用と両立する。

以下では、 $\log$  構造を加味して定義を修正したものを考えるが、その説明は省略する。

## 2 分岐群の性質 I

$L \supset K$  を上のとおりとすると、次の性質をみたす有理数  $0 = r_0 < r_1 < \dots < r_l$  が一意的に定まる。

- 各  $i = 1, \dots, l$  に対し、  $X^{(r)}$  は  $r \in (r_{i-1}, r_i]$  で一定かつ、  $r_i < r$  なら  $X^{(r_i)} \neq X^{(r)}$  である。

- $r \in (r_l, \infty)$  ならば、  $X^{(r)}$  は一点からなる。

以下、  $l > 0, r_l > 0$  とし、  $X^{(r_i)}$  を調べる。

命題 [1] 有理数  $r > 0$  に対し、次の条件は同値である。

- $r = r_l$  である。

- $\overline{Q_{\overline{F}}}^{(r)} \rightarrow \overline{P_{\overline{F}}}^{(r)}$  は有限エタールであり、自明な被覆ではない。

以下、  $r = r_l$  とおく。  $\overline{P_{\overline{F}}}^{(r)}$  は  $\overline{F}$  上の有限次元線形空間である。命題と分岐群の定義より、代数的基本群からの標準全射

$$\pi_1(\overline{P_{\overline{F}}}^{(r)}) \rightarrow G^{(r)}$$

が定まる。

以下、話を簡単にするため次の仮定をおく。  $r = r_l > 0$  は自然数であるとする。  $k$  を標数  $p > 0$  の完全体とし、  $X = \text{Spec } A$  を  $k$  上のスムーズなアフィン・スキーム、  $D = (\pi) \subset X$  をスムーズな既約因子、  $\xi$  を  $D$  の生成点とする。局所環  $\mathcal{O}_{X, \xi}$  は離散付値環であり、  $\pi$  はその素元である。  $K$  を完備化  $\mathcal{O}_K = \widehat{\mathcal{O}_{X, \xi}}$  の分数体とする。  $Y = \text{Spec } B$  を  $k$  上のスムーズなアフィン・スキームとし、  $Y \rightarrow X$  を有限平坦射とする。  $Y \rightarrow X$  は  $D$  の外でエタール

とし,  $D_Y = (Y \times_X D)_{\text{red}}$  はスムーズな既約因子であるとする.  $\eta$  を  $D_Y$  の生成点とし,  $L$  を完備化  $\mathcal{O}_L = \widehat{\mathcal{O}_{Y,\eta}}$  の分数体とする.  $K$  の剰余体  $F$  は  $D$  の関数体であり,  $L$  の剰余体は  $D_Y$  の関数体である.

図式

$$(2.1) \quad \begin{array}{ccc} T = \text{Spec } \mathcal{O}_L & \longrightarrow & Q = \text{Spec } B \otimes_k \mathcal{O}_K \left[ \left( \frac{1 \otimes \pi}{\pi \otimes 1} \right)^{\pm 1} \right] \\ \downarrow & & \downarrow \\ S = \text{Spec } \mathcal{O}_K & \longrightarrow & P = \text{Spec } A \otimes_k \mathcal{O}_K \left[ \left( \frac{1 \otimes \pi}{\pi \otimes 1} \right)^{\pm 1} \right] \end{array}$$

を考える.  $F$  線形空間  $\Omega_{X/k}^1(\log D)(rD)_\xi \otimes_{\mathcal{O}_{X,\xi}} F$  の双対空間が定める  $F$  上のスキームを  $\Theta^{(r)}$  とおく.  $\overline{P_{\overline{F}}^{(r)}}$  は  $\Theta_{\overline{F}}^{(r)} = \Theta^{(r)} \times_{\text{Spec } F} \text{Spec } \overline{F}$  と同一視される. 命題より,  $\overline{Q_{\overline{F}}^{(r)}} \rightarrow \overline{P_{\overline{F}}^{(r)}}$  は,  $\Theta_{\overline{F}}^{(r)}$  の非自明な有限エタール被覆を定める.

さらに,  $L$  は  $K$  のガロワ拡大であるとし,  $G = \text{Gal}(L/K)$  は  $Y$  に作用するとする.  $Y \setminus D_Y$  は  $U = X \setminus D$  上の  $G$  捻子である. 上の構成を使って, 次の定理が示せる

定理 1 [2]  $G^r$  は可換群である.

[証明の概略]  $G$  の  $Y$  への作用は,  $\overline{Q_{\overline{F}}^{(r)}}$  への作用を定める. これを幾何的作用とよぶ. 絶対ガロワ群  $G_K = \text{Gal}(\overline{K}/K)$  は,  $\overline{Q_{\overline{F}}^{(r)}}$  に自然に作用する. これは数論的作用とよぶ.  $G$  の作用と  $G_K$  の作用は可換である.  $\overline{Q_{\overline{F}}^{(r)}}$  の連結成分  $\overline{Q_{\overline{F},0}^{(r)}}$  をとる. 分岐群  $G^r$  と  $G_K^r$  は, どちらも  $\overline{Q_{\overline{F},0}^{(r)}}$  を  $\overline{Q_{\overline{F},0}^{(r)}}$  にうつす. よって, 群の準同形  $G^r \rightarrow \text{Aut}_{\overline{P_{\overline{F}}^{(r)}}}(\overline{Q_{\overline{F},0}^{(r)}})$  と  $G_K^r \rightarrow \text{Aut}_{\overline{P_{\overline{F}}^{(r)}}}(\overline{Q_{\overline{F},0}^{(r)}})$  が定まる. 1 つめは同形であり, 2 つめは全射である. よって,  $G^r$  は可換である. ■

$G^r$  は可換だから, 標準全射  $\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)}) \rightarrow G^r$  は  $\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{ab}} \rightarrow G^r$  をひきおこす.

### 3 分岐群の性質 II

$\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{ab}}$  の商  $\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{alg}}$  を, 次の性質をみたすように定義する:  $\Theta_{\overline{F}}^{(r)}$  の連結アーベル・エタール被覆  $V \rightarrow \Theta_{\overline{F}}^{(r)}$  が  $\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{alg}}$  の作用する有限集合と対応するための条件は,  $V$  が  $\overline{F}$  上の可換代数群の構造をもち, しかも  $V \rightarrow \Theta_{\overline{F}}^{(r)}$  が代数群の準同形となることである.  $\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{alg}}$  は  $p$  倍すると 0 になる射影有限アーベル群であり, その指標群  $\text{Hom}(\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{alg}}, \mathbb{F}_p)$  は, 双対空間  $\text{Hom}(\Theta_{\overline{F}}^{(r)}, \overline{F}) = \Omega_{X/k}^1(\log D)(rD)_\xi \otimes_{\mathcal{O}_{X,\xi}} F$  と同一視される. 標準同形は, アルティン・シュライアー被覆  $\mathbb{A}^1 \rightarrow \mathbb{A}^1 : x \mapsto x^p - x$  を引き戻すことで得られる.

定理 2 [4] 標準全射  $\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{ab}} \rightarrow G^r$  は,  $\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{alg}} \rightarrow G^r$  をひきおこす.

系  $G^r$  は  $p$  倍すると 0 である.

指標群  $\text{Hom}(\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{alg}}, \mathbb{F}_p)$  の記述より, 標準単射

$$\text{Hom}(G^r, \mathbb{F}_p) \rightarrow \Omega_{X/k}^1(\log D)(rD)_\xi \otimes_{\mathcal{O}_{X,\xi}} F$$

が得られる.

[証明の概略]  $\rho$  を有限群  $G$  の線形表現とし,  $\rho$  の  $G^r$  への制限は指標  $\chi$  であると仮定する. 標準全射  $\pi_1(\Theta_{\overline{F}}^{(r)})^{\text{ab}} \rightarrow G^r$  により,  $\chi$  は  $\Theta_{\overline{F}}^{(r)}$  上の階数 1 の局所定数層  $\mathcal{L}_\chi$  を定める.  $\text{pr}_1, \text{pr}_2, + : \Theta_{\overline{F}}^{(r)} \times \Theta_{\overline{F}}^{(r)} \rightarrow \Theta_{\overline{F}}^{(r)}$  を, 第 1 射影, 第 2 射影と和とする.  $+^* \mathcal{L}_\chi$  が  $\text{pr}_1^* \mathcal{L}_\chi \otimes \text{pr}_2^* \mathcal{L}_\chi$  と同形であることを示せばよい.

$\mathcal{F}$  を  $\rho$  が定める  $U$  上の局所定数層とする.  $U \times U$  上の局所定数層  $\mathcal{H}$  を,  $\mathcal{H} = \text{Hom}(\text{pr}_2^* \mathcal{F}, \text{pr}_1^* \mathcal{F})$  で定める.

$$(X \times X)^{(r)} = \text{Spec } A \times_k A \left[ \left( \frac{1 \otimes \pi}{\pi \otimes 1} \right)^{\pm 1}, \frac{1}{\pi^r \otimes 1} \left( \frac{1 \otimes \pi}{\pi \otimes 1} - 1 \right) \right]$$

とおき,  $j^{(r)} : U \times U \rightarrow (X \times X)^{(r)}$  を開埋め込みとする. 射影との合成  $(X \times X)^{(r)} \rightarrow X \times X \rightarrow X$  による  $\xi \in D \subset X$  のファイバーは  $\Theta^{(r)}$  である.  $j_*^{(r)} \mathcal{H}$  の  $\Theta_{\overline{F}}^{(r)}$  への制限は  $\mathcal{L}_\chi$  の直和である.

第 2 射影と第 1 射影に関するファイバー積  $(U \times U) \times_U (U \times U)$  は,  $U \times U \times U$  と同一視される.  $1 \leq i < j \leq 3$  に対し, 第  $i, j$  成分への射影  $\text{pr}_{ij} : U \times U \times U \rightarrow U \times U$  は,  $\text{pr}_{ij} : (U \times U) \times_U (U \times U) \rightarrow U \times U$  を定める.  $\text{pr}_{12}^* \mathcal{H} \otimes \text{pr}_{23}^* \mathcal{H} = \text{Hom}(\text{pr}_2^* \mathcal{F}, \text{pr}_1^* \mathcal{F}) \otimes \text{Hom}(\text{pr}_3^* \mathcal{F}, \text{pr}_2^* \mathcal{F})$  だから, 射の合成は

$$(3.1) \quad \text{pr}_{12}^* \mathcal{H} \otimes \text{pr}_{23}^* \mathcal{H} \rightarrow \text{Hom}(\text{pr}_3^* \mathcal{F}, \text{pr}_1^* \mathcal{F}) = \text{pr}_{13}^* \mathcal{H}$$

を定める.

スキームの射  $\text{pr}_{23} : (U \times U) \times_U (U \times U) \rightarrow U \times U$  は, スムーズ射  $\mu : (X \times X)^{(r)} \times_X (X \times X)^{(r)} \rightarrow (X \times X)^{(r)}$  に一意的に延長される. さらに  $\mu : (X \times X)^{(r)} \times_X (X \times X)^{(r)} \rightarrow (X \times X)^{(r)}$  の  $\xi \in D \subset X$  上のファイバーへの制限は和  $+ : \Theta^{(r)} \times \Theta^{(r)} \rightarrow \Theta^{(r)}$  と一致する. よって, 射 (3.1) は, 射

$$(3.2) \quad \text{pr}_1^*(j_*^{(r)} \mathcal{H}|_{\Theta^{(r)}}) \otimes \text{pr}_2^*(j_*^{(r)} \mathcal{H}|_{\Theta^{(r)}}) \rightarrow +^*(j_*^{(r)} \mathcal{H}|_{\Theta^{(r)}})$$

をひきおこす. これは同形  $\text{pr}_1^* \mathcal{L}_\chi \otimes \text{pr}_2^* \mathcal{L}_\chi \rightarrow +^* \mathcal{L}_\chi$  を与え, 定理が示される.

混標数の場合はもっと難しく, 離散付値環の長さ有限な商を考えることが必要になるが, 基本的には同様な方法により定理が証明される. [3]

## 参考文献

- [1] A. Abbes and T. Saito, *Ramification of local fields with imperfect residue fields*, American Journal of Mathematics, 124.5 (2002), 879-920
- [2] —, *ibid. II*, Documenta Mathematica, Extra Volume Kato (2003), 3-70
- [3] T. Saito, *ibid. III*, 準備中
- [4] —, *Wild ramification and the characteristic cycle of an  $\ell$ -adic sheaf*, arXiv:0705.2799